2006 年 10 月 12 日

2002FIFA ワールドカップ™記念　日本サッカーミュージアム

第 7 回「アドバイザリーボード」の概要報告

2002FIFA ワールドカップ™記念 日本サッカーミュージアムのアドバイザリーボードは、2006 年 10 月 4 日（水）の 14 時より 16 時まで、JFA ハウス 3 階ラウンジにおいて、第 7 回目の会合を開催した。

アドバイザリーボード委員　出席者

遠藤安彦、木村剛、大住良之、木元教子、民秋史也、平野哲行

日本サッカーミュージアム

岡野俊一郎（館長）

小野沢洋（JFA ミュージアム部部長）、津内香（JFA ミュージアム部）

オブザーバー

高橋功次（株式会社平野デザイン設計）

アドバイザリーボード委員　欠席者

石井幹子、二宮清純、日比野克彦、真野響子

ヴァーチャルスタジアム（SAMURAI BLUE 2006）視聴（14 時 10～30 分）

事務局より、黒田福美氏の 2006～08 期のアドバイザリーボード委員辞退と新規委員についての報告を行った（今期委員については、2006 年度第 5 回理事会において、2004～06 期の委員全員が継続することで承認済み）

館長挨拶

出席者に対してのお礼並びに引き続き委員を引き受けていただけること対してのお礼、黒田福美氏の委員辞退の報告があった。

本委員会において、活発な意見をいただきたいとの言葉があり、座長である木村剛氏に進行をお任せする旨の挨拶があった。

木村座長の進行により、議題に入る前に、ヴァーチャルスタジアム SAMURAI BLUE 2006 に関する意見交換が行われた。

・　映像が素晴らしく、「作品」としてとても良い。「記録」として残す（あるいは見せ

る）のであれば問題はない。

- 負けることが分かっていても、なおかつ高揚感を感じさせるほど素晴らしい出来である。
- テレビに映っていない場面、実際に現場にいながら見落としていた場面を見ることができる。「ここでしかみられない」という特別かつ、貴重な映像である。
- 記録だけではなく、「次へ」というメッセージは不可欠。
- 成績のよくなかったものを見せるだけでは、将来につながらない。例えば、最近の若い世代が活躍している映像などをつなげて、「次へのスタートを切り、展望が開けつつある」という期待感を出すべきではないか。
- 変えられるところは変えていけばよい。例えばラストシーンは中田選手一人だけでなく、全員の選手を順々にうつしたり、次世代を担う選手で終わるようにすればよいのではないか。
- 映像の追加が難しいようであれば、「ご声援ありがとうございました」に続けて、期待感のあふれる言葉を挿入するなど、少しの工夫でより良いものになると思う。
- サポーターの映像が少ないのではないか。試合の合間に若干出てくるが、「最後まで応援ありがとう。また一緒に戦いましょう」というメッセージを込めてラストにも入れてはどうか。
- ラストの音楽が少し沈む感じがするので、逆に盛り上がる感じのものにすれば良いのではないか。
- 「記録」を残すのか、夢を与えるのか、ミュージアムとしてのコンセプトを明確にすれば、制作の方針も自ずと決まってくるはず。制作の前にアドバイザリーボードでも意見を交わすべきであった。
- 前編・後編として本数を増やしてはどうか。

木村座長より制作にかかる費用及びHDDの容量に関する質問があり、事務局より、HDDの追加・書換に約1,000万円、容量は最大で60分であるが、1本20分が最適であるとの説明を行った。

以上のような意見交換に基づき、アドバイザリーボードとしては、来館者に将来への希望を感じてもらうためにも、コストはかかってもラストの場面を中心に若干の修正を加えていただきたい、との結論に至った。

事務局より、資料 1 にもとづき、入場者数、特別来客、運営、展示、イベント関連、パブリシティ（プロモーション展開）などについて報告を行った。

- 入場者数については、5～6 月は、特に 5 月の連休明けそして代表の発表前後から急激に増え、昨年の倍以上となった。ワールドカップによる取材が増えたためのパブ

リシティによるところも大きいと考えられる。
・　収蔵品の貸出によるパブリシティも、集客につながっていると思われる。
・　ミュージアムウェディングが、4 月と 7 月に行われ、また来年の予約も入っている。
（その他、資料 1 参照）

事務局からの報告を受け、今後の運営について、以下のような意見をいただいた。
・　ワールドカップの年は、集客も増える。つまり、良くも悪くもナショナルチーム次第であることを踏まえ、ミュージアムのあり方を考えるべきである。
・　リニューアルに期待がかかっているので、大きくパブリシティを打ってはどうか。

続けて事務局より資料 2 に基づき、リニューアルについての説明を行った。
・　「日本のサッカーすべてが分かる」ミュージアムとして、ピッチ（地下 2 階）では、過去から現在までを、今まで以上に充実した内容で紹介する。
・　ロゥアー（地下 1 階）では、J リーグコーナーを新設。

リニューアルに関して、以下のような意見をいただいた。(「→」部分は事務局よる回答)
・　選手に手紙などを出せるような方法を考えてはどうか。
・　ミュージアムのコンセプト（記録の保存、ヴィジュアルセンター機能、修学旅行等学習の場、選手をモチベートさせる場、サポーター拠点・・・）すべてを網羅するには物理的に狭すぎるので、いくつかの柱を決める必要がある。または、それらをうまく集約していかなければならない。
→　2005 年宣言に基づき、方向性を考えていきたい。

・　コンセプトが決まれば、レイアウトも自ずと決まってくるはず。
→　今後、大きなリニューアルをしなくても、展示の追加、修正などが行えるような形にしている。

・　ミュージアムは 2002 年のワールドカップがきっかけとなって設立されたものであるため、2002 年のゾーンは縮小すべきではない。必ず常設として残すべきである。
・　そのためには「2002 年」が何であったのか、その意義を整理する必要がある。
・　ワールドカップはサッカーの最大の祭典であり、そこでグループリーグを突破したこと、そして何より開催国として大会を成功させたこと、世界のファンに喜びを与え、それが笑顔のワールドカップとして引き継がれていることが重要であり、後世に残し伝えなければならない。受賞した「フェアプレー賞」の意味を理解してもらうことが必要である。
→　そうした点は最重要課題として捉え、それらを今回新しくできる 2002 年ゾーンに

集約している。

- 「2002FIFA ワールドカップがあってミュージアムが存在すること」が一目で分るようなパネルなどを設置すればよい。
- 「2002 年」の意義も含めて、ミュージアムのあり方をきちんとまとめなければならない。

リニューアルの説明に引き続き、ミュージアムのあり方についてご意見をいただいた。

- ミュージアムのあり方について、今後中長期的な運営を行うにあたり、その原点となるべき基本的なコンセプトをまとめていく必要がある。
- ミュージアムのあり方が定まれば、企画、運営、財政面での方向性が明らかになり、展開がスムーズになる。
- 「2002 年」の意義も踏まえて考えていくべきである。

以上のような意見を参考に、まずは JFA としてのミュージアムの理念・運営方針（案）を事務局でまとめ、次回以降調整をしていくこととした。

最後に、次回のアドバイザリーボードの開催を 12 日 8 日（金）午後 2 時からとし、閉会した。

財団法人　日本サッカー協会
ミュージアム部長　小野沢洋